

結核予防会前史—「日本結核予防協会」と北里柴三郎博士, 矢野恒太氏

結核予防会理事長 工藤 翔二

執筆協力：学校法人北里研究所理事長 小林 弘祐
学校法人北里研究所北里柴三郎記念室 森 孝之

19世紀半ば、1858年にイギリス人医師、ベンジャミン・ホブソンによって書かれた『内科新説』には、『英米二國百人死者勞證居三十焉（英米兩國では病死者100人のうち30人は勞證による）』（註 勞證：結核のこと、勞病、勞咳、癆瘵、肺癆などともいう）と記されている。まだ、結核が感染症として理解されていない頃である。それから20年以上を経た1882年、ドイツのローベルト・コッホによって結核菌が発見された。

北里柴三郎博士と「日本結核予防協会」

明治中期、欧米より半世紀遅れて軽工業を中心とした産業革命を迎えた日本は、結核蔓延期が始まっていた。北里柴三郎博士（**図1**）は、1886（明治19）年、



図1：北里柴三郎博士
(1853～1931)

ベルリンのコッホ研究室に留学し、R.コッホの下で破傷風菌の純培養、血清療法の発見など大きな成果を挙げた。博士は、1890（明治23）年に皇室から結核治療研究のために金一千円を下賜され留学を1年延期し、1892年（明治25）年に帰国した。翌

年の1893（明治26）年に、福沢諭吉や森村市左衛門らの援助により結核専門病院「土筆ヶ岡養生園」を東京・白金に開設した。1889（明治22）年開設の須磨浦療病院、1892（明治25）年開設の鎌倉養生院に続くものであった。その後、1897（明治30）年に杏雲堂平塚分院、1899（明治32）年には中村恵風園療養所と南湖院が次々と開設されている。樋口一葉（明治29年没）、正岡子規（明治36年没）、石川啄木（明治45年没）も、この時代に結核で命を落とした。

博士の招きによる1908（明治41）年のR.コッホの

来朝は、日本の結核対策に大きな刺激を与えた。博士は1913（大正2）年、医師であった第一生命保険相互会社（現在の第一生命保険株式会社）の創業者・矢野恒太氏らの支援を受けて、「日本結核予防協会」を創設した（1921（大正10）年財団法人となる）。全国各地に地方組織を設立し、以来25年以上にわたって結核対策、普及啓発活動を推進した（**図2**）。1935（昭和10）年には



図2：日本結核予防協会の普及啓発パンフレット（昭和初期のもの、結核研究所所蔵）

除役結核軍人療養施設として財団法人村松晴嵐荘（現在の国立病院機構茨城東病院）が開設さ

れた（2年後に国に寄付）。運営は日本結核予防協会（会頭：徳川閔順）に委託され、博士の門下生である高野六郎博士が村松晴嵐荘の荘長を務めた。「日本結核予防協会」の歴史は、『日本結核予防協会沿革畧誌』に詳細が記されている（**図3**）。協会創設時の役員は、会



図3：『日本結核予防協会沿革畧誌』（結核研究所所蔵）

頭、副会頭2名、理事12名からなり、理事長は北里柴三郎博士、理事の一人は矢野恒太氏であった。なお、博士は、1914（大正3）年に土筆ヶ岡養生園の地に北里研究所を創立、1923（大正12）年には結核研究の進展と結核対策を目的として日本結核病学会を設立している。

結核予防会の発足と「日本結核予防協会」の解散

1939（昭和14）年、2年前に日中戦争が開始され、前年には国家総動員法が制定、第二次世界大戦勃発を間近にして、皇后陛下の令旨を受けて5月1日の閣議

で結核予防会の設立が決定された。時の廣瀬久忠厚生大臣は6月1日付で徳川圀順結核予防協会会頭に書簡を寄せ、「新設の結核予防会と一元的体制を整備」することを要請した。これを受けて、創立以来25年以上にわたってわが国の結核対策を民間の立場から推進してきた「日本結核予防協会」は、11月8日、金沢市で開催された日本結核予防協会全国協議会で結核予防会への合流が議決され、自らを発展的に解散した。全国に支部も設け、民間の立場で国民に広く結核予防の啓発を行う組織として貴重な役割を果たし、より強固な民間公衆衛生組織への礎を築いたと言えよう。『日本結核予防協会沿革略誌』によれば、予防協会発足時から解散時まで協会の理事を務めたのは、金杉英五郎博士（東京耳鼻咽喉科学会（現在の日本耳鼻咽喉科学会）の創設者、衆議院議員、貴族院議員）及び矢野恒太氏（第一生命保険相互会社創業者）の二氏のみであり、結核予防会新設にあたって金杉氏は監事に、矢野氏は理事に就任している。北里柴三郎博士は1931（昭和6）年に逝去され、日本結核予防協会の解散及び結核予防会の発足には関わっておられない。

矢野恒太氏と保生会



図4：矢野恒太氏
（1866～1951）

昭和に入っても結核で年間12万人が死亡。第一生命保険相互会社社長矢野恒太氏（図4）は、1935（昭和10）年、自ら財団法人保生会を設立し、結核療養所の建設、早期発見、治療、相談などの事業に乗り出した。会長は矢野氏、理事長は梅毒の特効薬を発見した世界的な細菌学者、

北里研究所副所長の秦佐八郎博士であった。秦博士は第三高等中学校医学部（後の岡山医専、現・岡山大学）の矢野氏の後輩であった。矢野氏は、自ら保生会の原案をつくり、これを内務省衛生局に諮った。この企画には浜野規矩雄内務技師や岡治道東京市技師（後の結核研究所所長）らが参画することになった。こうして、現在の結核予防会本部の位置に保生会館（図5）が出来たのが1938（昭和13年）1月であり、つづいて東京府下東村山村に保生園（現在の新山手病院）が竣工したのが、1939（昭和14年）5月であった。まさに、

令旨を奉戴して結核予防会が設立される直前であった。時運に留意した矢野氏は、同年9月14日、保生会の施設、財産の一切を挙げて、結核予防会に寄付することを申し出た。



図5：保生会館（水道橋、後に結核予防会に寄付）

同社は、結核予防会の基盤形成から現在に至るまで、様々な領域で支援されている。一会社である第一生命保険会社の結核予防に果たして来た役割は先駆的であり、公衆衛生事業における社会貢献のモデルともいえよう。

北里研究所の発展と連携協定

北里柴三郎博士の日本の医学、医療の歴史における絶大な貢献は周知のことであり、北里研究所はその金字塔でもあるが、結核病学、結核予防活動においても大きな先駆的役割を果たし、結核予防会の設立につながる貴重な存在である。

北里研究所は、現在、学校法人北里研究所（小林弘祐理事長）として発展しており、2015年ノーベル生理学・医学賞を受賞された大村智特別栄誉教授はじめ多くの研究者が活躍されている。2019年2月7日、公益財団法人結核予防会と学校法人北里研究所は、北里研究所と結核予防会における結核療養等に係る歴史的背景を踏まえ、協力関係をより強化発展させ、結核予防に関する包括的・継続的な連携を推進し、新たな治療薬の創出、人材育成等、結核の予防啓発、教育・研究に寄与することを目的として、「包括的連携協定」を締結した（図6）。🐦



図6：結核予防会と北里研究所の「包括的連携協定」締結式